

第 57 話 (33 頁) 商人と工員さん

ゆうふくな商人が、お金の入ったさいふをなくしてしまい、さいふには 2000 ルーブル入っていたのですが、お金を見つけたものには、その半分をあたえると、約束しました。工員さんがさいふを見つけて、商人にもってきました。商人は約束の半がくをあげるのがおしくなりました。商人は、さいふにはお金のほかに、宝石もあったことにしようと思いついて、こう言いました。

「お金をやるわけにはいかない。さいふには宝石が入っていたのだ。宝石をよこしたら、1000 ルーブルをあげよう。」

工員さんはさいばん官のところに行きました。さいばん官のさばきは、こうでした。さいばん官は商人に言いました。

「さいふには 2000 ルーブルと、さらに宝石が入っていたとのこと。だが、このさいふには宝石は入っていないから、さいふはあなたのものではないということになる。このさいふは持ちぬしが見つかるまで、工員さんがもっていることにして、あなたは、なくしたものについてけい示を出しなさい。もしかしたら、見つかるかもしれない。」

商人は言い争いはやめることにして、工員さんに 1000 ルーブルをわたしました。

「いざ、2000 ルーブル入りの財布が見つかったら、商人は途端に約束を反故にした。財布には実は宝石も入っていたんだ、とうそをつき、見つけた工員を逆に盗人扱いした。」

「悪知恵というか、浅知恵というか、商人は大阪言葉でいう『しみつたれ』。最初から『ゆうふくな』商人と出てくるだけに、その印象が強いよ。」

「半分あげるのが惜しくなって、とっさに思い付いた。もし最初からそんなシナリオをつくっていたら、ずっと狡猾でずる賢かったことになるけど、ね。」

「商人は悪者、工員は正直者の善人、裁判官は正義の味方。登場人物 3 人の役割が、身分や立場によってきちっとステレオタイプ化されている。」

「確かに。工員だけが『さん』づけで、それだけで立場が分かっちゃう。」

「裁判官は、商人の言い分の方が正しいのかも、とは考えなかったのかな。読み進める限り、最初から工員に軍配を上げようとしている。」

「宝石が入ってないから、商人の財布ではない。まさに大逆転の大岡裁きで、裁判官の面目躍如だよ。」

「機転や頓智を利かせたというわけだ。第 37 話『飲みくらべ』(21 頁) とも、その点では似ている。」

「似ているといえば、やっぱりシェークスピアの『ヴェニスの商人』が筆頭だろう。同じよ

うに、悪知恵の商人も、裁判官も登場してくる。」

「商人がした『約束』だけど、誰に対してどのように知らせたのだろうか。」

「不特定の人たちに広く知らせた、という意味だろうから、少し前なら電柱への貼り紙、その後はチラシやポスター、いまならインターネットだね。」

「裁判官は商人に向かって『なくしたものについてけい示を出しなさい』と言っている。この掲示も、前の約束も、同じやり方を指していると思うのだが…」

「ところで、2000 ルーブルって、いまだと、どのぐらいの価値なのか。」

「第 50 話『お百姓と王様のめしつかい』(29 頁) では、1000 ルーブルで少なくて 100 万円、多くて 2000 万円という試算になった。でも、ここだと、どんなぐらいの大きさの財布だったのか。低い方の 1000 ルーブルで 100 万円としても計 200 万円。財布の中身としては、ちよっと現実からかけ離れている気もするけど…」